

令和3年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文



高等学校の部 最優秀賞

「イスラムを通して見たダイバーシティ」

福島県立葵高等学校

2年 入岡 奈々葉

グローバル化が進み、日本を訪れる外国人が年々増加する一方で、ヘイトスピーチなど外国人とのトラブルも起きている。6月には南アジア出身のムスリムの女性と3歳の長女に対し、警視庁の警察官が違法な取り調べをするという事件が起きた。発端は長女が滑り台で遊んでいたところ、近くにいた男性が、思い込みから何もしていない女性と長女に対して「息子が蹴られた」と抗議したことだ。その後、現場に駆けつけた警察官も女性の長女に対して「お前がどうせ蹴ったんだろ」「本当に日本語しゃべれねえのか」と問いただし威圧した。またトラブルの相手の男性が「外人生きている価値ない」などの差別発言を浴びせ続けたにも関わらず、警察官たちは制止することもなく、ムスリム親子を警察署に連行し、長時間に渡る取り調べの上、同意無しに相手方へ住所や氏名などの個人情報漏らした。3歳の女兒は心的外傷の症状を訴えているという。

日本人はとかく欧米人に対しては寛容であるが、それ以外の外国人には差別的になることが多い。名古屋入管で死亡したウィシュマさんの事件も同様である。ウィシュマさんは夢を持ってスリランカから来日したが、在留資格を失い名古屋入管の施設に収容された。体調不良を訴えるも治療を受けることのないまま死亡した。ここには不法滞在者＝犯罪者という意識、偏見も透けて見える。

そんな中現代文の授業で「イスラム感覚」という教材に触れた。先生は授業の冒頭でイスラム教のイメージをみんなに尋ねた。クラスメイトから出た意見は「怖い」「治安が悪い」「テロリスト」など、マイナスイメージのものが多かった。私もその時は「イスラム教は厳しそうだ」と感じていた。2011年に実施された岐阜市の外国人に対する意識調査を目にしたことがあるが、64.6%の人が「イスラム教は教えが厳格だ」と感じ、58.6%が「イスラム教＝紛争、事件」と答えている。

しかし、教材を進め読み、また同時にイスラム教について調べていくうちに、私自身が知らず知らず抱いていた偏見に気づいた。

その一つは、イスラム教＝中東という思い込み、そしてイスラム教徒＝テロリストという思い込みだ。確かにイスラム教発祥の地は中東ではあるが、インドネシアや北アフリカなど全世界に信者は広がっている。特にインドネシアでは、国民の9割近くがイスラム教を信仰している。北アフリカは、アフリカ大陸の中でも特に多くのムスリムが集中している。日本にも約10万人のイスラム教徒がいるという。全世界の信者の数で言えば、キリスト教に次いで世界2位である。

またイスラム国などのテロ組織はあるものの、当然ながらイスラム教徒だからといってテロを起こすわけではない。多くのイスラム教徒は「イスラムの理想に戻れ」というイスラ

ム復興運動を支持しているが、その人々はテロリストではない。彼らは経済の停滞や貧富の差の拡大があった場合、その乱れている今の世を昔の理想に戻すべきだと考えている人たちである。例外的にその中のごく一握りに、理想社会を実現するためにはテロも許されると解釈する人がいるだけなのだ。テロを実行する人たちは自己の行為の正当化としてジハードを掲げている。ジハードは聖戦と訳され、神のために努力をすることという意味を持っており、戦死した殉教者は無条件で楽園へ行けるとされているそうだ。しかし、こういったテロリストなどによって厳格であると思われるイスラム教も、調べてみれば平和主義を基調とした社会的弱者に優しい宗教である。預言者たちの神性を一切認めず、彼らはどこまでも人間であり、すべてのムスリムは平等であると考え。喜捨という考えも貧しい人たちへの救済措置と言えよう。

偏見を持ったままでは外国人とよい関係を築くことはできない。歪んだ見方を払拭し、異文化理解を進めていくためにはどうしたらよいただろうか。私はまず文化の多様性に触れ違いを認め、そこから学ぼうとする姿勢が大切だと考える。人はどうしても自分の物差しで物事を判断しがちである。しかしそれが行き過ぎると、自民族・自文化を中心とするエスノセントリズムに陥る。日本で問題化しつつあるヘイトスピーチや、ヨーロッパにおける移民排斥運動などがその例だが、そういった一部の差別主義者だけに該当することではなく、私たち全員が知らず知らずのうちに抱えている偏見に自覚的になる必要があるだろう。私がイスラム教を厳格だと感じていた理由の一つに断食があるが、高齢者や10歳以下の子どもは免除されていたり、病人や兵士は期間を変更したりする柔軟性がある。また親族や友人の訪問が頻繁になり夜遅くまで語らうことができ、街には活気があふれ、テレビは特別番組を放送し・・・と、実は一年のうちで最も楽しい時期だと聞き、見方が変わった。逆に日本で当然だと思われる生食も、外国人からすれば、「生の魚や卵を好む日本人の嗜好は奇妙だ」と誤解の種になるかもしれない。世界にはいろいろな文化や価値観があることを理解し、受け入れることが大切だ。

そして、歴史を知ることを見方の変化に繋がるだろう。なぜ、いつ、どこで、どのように・・・と調べていくうちに、正しい知識を得て偏見はなくなるのではないか。中東で戦争が多い理由は、ユダヤ人とアラブ人の聖地を巡る問題にイギリスが介入したことと関連がある。「イスラム教だから…」という理由はこの場合は間違っている。それは宗教の特性というよりも、歴史的な背景に負う部分が多い。過去を知り正しく理解する必要がある。

パリ同時多発テロからわずか数日後、パリの広場にイスラム教徒の男性が目隠しをして立っていた。そばにあったボードには「イスラム教徒である自分はテロリストだと言われるが、もし私を信頼してくれるならハグしてください」と書かれていた。テロ事件の記憶が生々しいパリの街中であつたが、それを見た人々は一人、また一人と彼に近づき、ハグをした。これは心温まる出来事だ。この男性が言うように、テロリストはあくまでもテロリストであり、イスラム教徒は何の理由もなく人を殺したりはしない。そしてなにより目の前にいる一人の男性を、人間として尊重する気持ちが素晴らしい。かつての私が「イスラム教って何か怖い」という歪んだイメージを持っていたことについて、申し訳ない気持ちになる。

世界にはいろいろな人がいる。今後外国人との関わりも増え、ダイバーシティが重要視される時代になっていくだろう。まずは違いを知ることから始め、少しずつ理解していくことが大切だ。東京オリンピックの基本コンセプトは「多様性と調和」だった。違いを認め、繋がり合うことができる、そんな世の中にしていきたい。

参考文献

外国人に対する意識調査 <https://imemgms.com>

「イスラームを知ろう」清水芳見 岩波ジュニア文庫

「となりのイスラム」内藤正典 ミシマ社

「面白いほどよくわかるイスラーム」塩尻和子 青柳かおる 日本文芸社

「時事から学ぶ小論文 第5号文化編」朝日新聞社 朝日新聞出版

「池上彰の講義の時間 高校生からわかるイスラム世界」池上彰 集英社